

他者認知の身体性

——相互行為説の理論的価値——

宮原克典

序論

近年の他者認知研究は、哲学、発達心理学、神経科学、霊長類研究、自閉症研究など様々な分野を横断して、「心の理論」[theory of mind]あるいは「素朴心理学」[folk-psychology]という概念を中心に展開されている。「心の理論」あるいは「素朴心理学」とは、他者の言動を意図、信念、欲求などの心的状態によって引き起こされた発話・行動として解釈するための能力である。他者認知とは、この概念を用いるならば、「心の理論」を用いて他者の言動の隠れた原因としての心的状態を読み取ること（マインドリーディング）だと考えられる。⁽¹⁾ 理論説 [theory theory] によると、「心の理論」は文字通りに一種の理論である。他者認知とは、他者の言動の背後に心的状態という理論的存在を仮定して、その仮定から素朴心理学法則に基づいた推論を行い、他者の言動を説明したり予測したりすることにはかならない (Baron-Cohen 1995; Churchland 1989)。それに対して、シミュレーション説 [simulation theory] によると、「心の理論」という名称は一種の比喩でしかない。他者認知とは、特定の状況に置かれた他者に出会ったときに、自分がその状況に置かれていることを脳内でシミュレートして、そのシミュレーションのなかで自分が

「仮想的に抱く心的状態を他者に帰属させることにはかならない」(Gallse and Goldman 1998; Gordon 2009)。理論説とシミュレーション説の対決は、長らく他者認知をめぐる哲学的探究の中心的な話題とされてきた。

だが最近、理論説とシミュレーション説のどちらとも異なる見方として、マックス・シューラーやモーリス・メルロー・ポンティの現象学に強く動機づけられて「相互行為説」[interaction theory]と呼ばれる理論も提出されている (Gallagher 2001, 2005; Gallagher and Zahavi 2008; Krueger and Overgaard forthcoming; Ratcliffe 2008)。相互行為説によると、日常的な他者認知は、二人称的な相互行為のなかでの「評価的理解」[evaluative understanding] (Gallagher 2001, 94)として特徴づけられる。さらに、「他の人間を理解することは、第一には理論的でもなければ、内的なシミュレーションに基づいてもおらず、それは一種の身体的実践である」(Gallagher 2001, 85)。つまり、理論説とシミュレーション説のあいだでは、少なくとも、日常的な他者認知が「心の理論」の働きに媒介されて頭の中で進行する認知的活動だという点では合意が成立しているのに対して、相互行為説によると、日常的な他者認知は相互行為という身体的実践と独立に理解可能な認知的現象ではない。それに対応して、他者認知のための日常的な心理学的能力とは、頭の中で理論的推論やシミュレーションを行うための「心の理論」ではなく、他者と情動とタイミングの調整された相互行為を行うための身体的技能だと考えられる。

本論の目的は、相互行為説の理論的な位置づけを明確に確定させることである。二〇〇一年にシヨン・ギャラガーによって提唱されて以来、相互行為説は賛否両論、多くの反応を引き起こしてきた。しかし、それがどのような点で理論説／シミュレーション説と対立し、どのような論拠を持ち、どのような射程を持ち、どのような課題を抱えた仮説なのかは、これまで必ずしも明確にされてこなかった。これは部分的には「現象学」という馴染みの薄い方法論が導入されたことの影響かもしれない。いづれにしろ、このような現状を放置しては相互行為説をめぐる美り多い議論は期待できない。そもそも相互行為説は何を主張しているのだろうか。なぜ「現象学」が有効な

道具立てとなりうるのだろうか。これはどのような展開の可能性を持つ仮説なのだろうか。以下では、これらの問題に一定の解答を与え、他者認知をめぐる今後の研究が進むべき道筋を私なりに提案したい。

1 日常的な他者認知の基本的特徴：「二人称的態度の優位性」と「日常的な他者認知の直接性」

「心の理論」という概念の説明力の射程は、必ずしも明らかではない。「心の理論」に関する科学的探究は、子供の他者認知能力の発達や自閉症児・自閉症者の社会的能力の障害を主題とすることが多い。しかし、多くの理論説論者、シミュレーション説論者が、「心の理論」という概念で説明できるのはこれらの局所的現象だけではないことを示唆する。彼らは「心の理論」という概念により汎用的な説明力を見て取り、「心の理論」の働き（理論的推論あるいはシミュレーション）は日常的な他者認知の基本的構造の一部をなすと考える。^②以下、簡便のため、このような主張を「基本構造テーゼ」と呼ぶ。^③確かに、人は理論的推論やシミュレーションを用いて他者の心的状態を認識することはある。しかし、ここで用いられているのは、本当に他者認知のための「日常的な心理学的能力」なのだろうか。そもそも、日常的な他者認知が問題となるときに説明されなければならないのは、どのような現象なのだろうか。

相互行為説の主な動機の一つは、日常的な他者認知という現象に関して理論説とシミュレーション説に共有される前提に対する現象学的批判である。本節では、相互行為説の主唱者であるショーン・ギャラガーの現象学的批判を再構成して、相互行為説の出発点となる二つの現象学的主張——「二人称的態度の優位性」と「日常的な他者認知の直接性」——の内容と論拠を示したい。

1.1 他者の心の直接的な評価的理解

基本構造テーゼでは、日常的な他者認知の基本的特徴に関して次の主張が言わば自明の前提とされている。

- 日常的な他者認知の間接性：日常的な他者認知とは、他者の心的状態（信念、欲求、意図など）を「心の理論」の働きを介して間接的に理解することである

人が知覚によって直接に認知できるのは身体運動や音声だけである。それゆえ、他者の心を理解するためには知覚だけでは不十分で、理論的推論やシミュレーションを行って、無意味な運動や音声の背後に心的な意味を読み取ること（あるいは、与えること）が不可欠だ、ということである。⁽⁴⁾しかし、これはどれほど妥当な前提なのだろうか。確かに、眼や耳などの感覚器官は物理的刺激にしか反応しない。なので、人が直接に知覚できるのは物理的環境だけであり、他者の心を直接に経験することなどできるはずがない、と考えても良さそうなものである。しかし、このように想定できるのは、現象学者モーリス・メルロー・ポンティの言葉を用いるならば「客観的世界という偏見」(Merleau-Ponty [1945] 2006, 28) に囚われる場合だけ、すなわち、人が直接に経験するのは客観的な用語で記述可能な事物だけだとあらかじめ前提して、実際の経験のあり方に目を向けない場合だけである。現象学の見方にしたがうならば、認知の特徴に関する主張は、実際の認知の経験のあり方（「事象そのもの」）を参照して行われなければならない。現在の文脈で言うならば、日常的な他者認知の基本的特徴に関する主張は、実際の日常的な他者認知経験に即して行われなければならない。⁽⁵⁾

しかし、日々の他者認知経験を反省すると、「間接性」の当てはまらない状況もあることが分かる。典型的なのは、

二人称的な相互行為のなかでの他者認知である。

他者認知を行う主体と認知される他者は三人称的な間主観的關係に立つ場合と二人称的な間主観的關係に立つ場合がある。⁽⁶⁾ 三人称的な関係とは、例えば、天体観測を行う天文学者と観測される天体のあいだで成り立つ「方的な関係である。一方で、天文学者のふるまいは天体のふるまいに対して自律的である。天文学者は観測対象のふるまいとは関係なく、好きなきまで観測を続けることができるし、いつでも観測を止めることができる。他方で、天体のふるまいも観測の営みに対して自律的である。観測対象のふるまいは観測の影響を受けて決定されるわけではない。⁽⁷⁾ それに対して、二人称的な間主観的關係は、典型的には身体的な相互行為を行う主体のあいだで成り立つ相互的な関係である。三人称的な関係の場合と異なり、二人称的な相互行為では、一方の態度や活動は他方の態度や活動に影響を及ぼさないわけにも、また、影響を及ぼされないわけにもいかない。例えば、会話に興じる友人同士、共同作業を行う人々、一つのボールを取り合う二人のサッカー選手などは、二人称的な関係に立つ。これらの状況では、一人のふるまいはつねに他者のふるまいに対する応答、あるいは他者のふるまいに動機付けられたものとして行われる。⁽⁸⁾

二人称的な間主観的關係において人々が互いの考えを全く理解していない、と言うことはできないはずである。では、人々は互いの心的状態を理論的推論やシミュレーションによって理解しているのだろうか。必ずしも、そうではないように思われる。例えば、円滑に進む会話において、人は、推論やシミュレーションを介することなく、相手の言ったことに対して、一定の態度を取ったり、応答を行ったりしているように思われる。もちろん、発言が聞き取れなかったり、その意味が分からなかったりした場合など、相手の思惑を推理することがないわけではない。しかし、少なくとも会話が円滑に進むあいだ、私たちは、ただ相手の顔を見て発言を聞くだけで、適切なタイプの応答を適切なタイミングで返すことができる程度まで相手の意図を理解することができる。ギャラガーは、このよ

うな仕方での理解を「評価的理解 [evaluative understanding]」(2001, 94)と呼ぶ。それは、他者の心的状態をそれとして認識することなく、他者の言動を「それに応答すべき仕方」の観点から「実践的に」理解すること、言い換えると、特定のタイプの行為や応答を動機付けるものとしての他者に会おうこと、として特徴づけられる。現象学の見方にしたがうならば、少なくとも二人称的な相互行為の相手に対する評価的な他者認知に関しては「間接性」を想定することはできない。

1.2 三人称的態度は日常的ではない

そうだとすると、「日常的な他者認知の間接性」を想定できるのは、それに加えて「三人称的態度の優位性」という考え方を同時に想定する場合だけだと言いうことができる。

- 三人称的態度の優位性・日常的な他者認知とは、他者の心的状態を三人称的な観点から一方的に理解する(6)

しかし、日常的な他者認知における「三人称的態度の優位性」を想定することは、現象学的に言って、どれほど妥当なことだろうか。

語用論研究の分野では、他者の発言から他者への意図を理解することは一種の推論を行うことだという見方が広い支持を得ている。例えば、言語学者の松井智子は、発話における「言語の意味」と「伝えたい意図」の乖離に基づいて、日常的な会話のなかで相手を理解することは一種の「推論」にほかならないと主張する(松井2007、

2009)。彼女は次のような例を挙げる。

男：近くに美味しいワインを飲ませる店があるんだけど

女：明日、早いです (2007, 28)

一方で、女性は、男性が文の意味そのものを伝えたいのではなく、自分をワインの店に誘おうとしていることを理解している。他方で、女性の返事を受けた男性は、女性が単に「明日、早い」と伝えたいのではなく、誘いを断ろうとしていることを理解するものと思われる。確かに、このように考えると、会話のなかで他者を理解するための心理学的能力とは、発話された文から他者の心的状態へといたる推論を行う能力にほかならないと思われるかもしれない。ここでの推論は、相手の発話を最も良く説明する心的状態への推論にほかならない。それゆえ、ここでは日常的な会話での他者認知における「三人称的態度の優位性」が主張されていると考えることができる。

しかし、この描写は具体的な経験そのものの記述としては的確ではない。経験そのものに即して言うならば、女性は、男性の心的状態を推理することなく、「返事をする」とあるいは「誘いを受けるかどうか検討すること」へと動機づけられる。女性の返事を受けた男性も女性の心的状態を推理することなく、「返事をする」とあるいは「落胆すること」へと動機づけられる。つまり、二人は、互いの意図を推論の媒介なしに評価的に理解する——特定のタイプの身体的／情動的応答を動機づけるものとして経験する——二人称的關係に立つように思われる。このことは、女性の返事を少し変えた次の事例を考慮すると、いつそう明らかである（この事例も松井の挙げるものである）。

男・近くに美味しいワインを飲ませる店があるんだけど

女・ワイン飲むとすぐ酔っちゃうんです (2007, 28)

ここでは、女性がワインの店に行きたいのか行きたくないのか、さきほどの場合に比べて明らかではない。そこで男性は女性の口調、表情、仕草などから心的状態を推論するかもしれない。この事例と対照させるならば、最初の事例では、男性が女性の心的状態を推論の結果として主題的に認識していたわけではなく、単に評価的に理解していただけであったことがはっきりするだろう。このように客観的に説明すると心的状態に関する三人称的な認識が成立しているように見える状況でも、経験そのものに目を向けると、実際に行われているのは二人称的な評価的理解ではないことがありうる。もともと松井は、日常的な他者認知の推論的性格を示すためにこの事例を利用していった。このことは同様の分析が日常的な他者認知の多くの場面において可能であることを証明するとは言わないまでも、強く示唆しているように思われる。

そうだとすると、日常的な他者認知に関して「三人称的態度の優位性」と「間接性」を想定することはできない。代わりに、相互行為説では、他者認知という現象に次の二つの特徴づけが与えられる。

- 二人称的態度の優位性・日常的な他者認知とは、第一には、二人称的な相互行為のなかで他者を評価的に理解すること（他者の言動を特定のタイプの身体的／情動的応答の動機として経験すること）である。
- 日常的な他者認知の直接性・他者に対する評価的理解は、「心の理論」の媒介なしに直接的に成立する

すなわち、日常的な他者認知とは二人称的な間主観的關係のなかで成立するタイプの他者認知のことであり、それ

は「第一には」直接的な評価的理解として経験される。ここで「第一には」という留保が付くのは、一つには、他者の心的状態そのものを主題的に認識することも日常的な他者認知の重要な一面だからだと考えることができる。つまり、相互行為説は、他者の信念、欲求、意図などをそれとして主題的に認識することが日常的な認知的活動の一面であることを否定するものではない。この点については3節で再び考察する。

いずれにしろ、以上の議論が正しいとすると、他者認知のための日常的な心理学的能力を考察するにあたって、他者の心的状態に関する三人称的な主題的認識を主要な手掛かりとすることは、現象学的に不当な方法論である。現象学の観点からすると、「私たちの努力のほとんどは、実践的な相互行為と評価的理解に費やされて」おり、「私たちが三人称的な説明と予測というより特殊な実践に訴えるのは、二人称的な実践的相互行為あるいは評価的理解の試みが頓挫するときだけ」(Gallagher 2001, 94-95; 2005, 213)である。それゆえ、日常的な他者認知を「心の理論」に媒介された認知的活動と見なすことはできない。むしろ、このような間接的な他者認知は、直接的な評価的理解が成立しない場合に登場することがあるだけの非常に特殊な認知的活動だと考えられる。理論説やシミュレーション説は、この特殊な認知的活動の説明ではありえても、日常的な他者認知の基本的構造の説明ではありえない。

2 スボルディングの反論：「現象学の可謬性」と「現象学の無関係性」

日常的な他者認知に対する現象学的な考察にしたがうならば、日常的な他者認知とは、他者の行動を心的状態の観点から三人称的に説明／予測することではなく、第一には、二人称的な相互行為のなかで他者を評価的に理解することである。それゆえ、日常的な他者認知を(理論説的あるいはシミュレーション説的)「心の理論」に媒介されるものとして説明する基本構造テーゼに正当性は認められない。

このような現象学的批判に対する反論の一つは「現象学」という方法論に向けられる。例えば、スポルディングは、ギャラガーの現象学的批判に「現象学の可謬性」と「現象学の無関係性」という二つの論点を挙げて反対する (Spaulding 2010)。(9)

- 現象学の可謬性…日常的な他者認知は、現象学的には二人称的な相互行為のなかでの評価的理解であるように思われるかもしれないが、もしかしたら現象学的反省のほうが間違っていて、人が実際に「行う」は三人称的な説明／予測かもしれない。
 - 現象学の無関係性…日常的な他者認知は、現象学的には二人称的な相互行為のなかでの評価的理解であるように思われるかもしれないが、これは「心の理論」の暗黙的な働きを否定する理由にはならない。
- 第一の主張が正当だとすると、「日常的な他者認知とは基本構造テーゼで想定されるような現象ではない」という論点は完全に失敗していることになる。第二の主張が正当だとすると、日常的な他者認知に関する現象学的反省は、従来のモデルと矛盾するものではなく、せいぜい他者認知の現象学的特徴に関する新しい指摘をするものではない。本節では、これらの見方が妥当ではないことを示したい。

2.1 「可謬性」は現象学の欠陥ではない

「現象学の可謬性」は現象学という方法論に対する無知に由来する反論ではない (Gallagher and Zahavi 2008, 19-21)。スポルディングは現象学的記述が可謬的であるということから、ギャラガーの現象学的記述は信用できな

いと結論する。しかし、そもそも現象学的記述が無謬だと想定する現象学者などいない。現象学者が要求するのは、現象学的記述に無批判にしたがうことではなく、経験のあり方について語る際に「客観的世界の偏見」などを取り去るよう努めること（「現象学的還元」を意識的に行うこと）にすぎない。どのような現象学的記述も、それが不徹底な現象学的還元のプロダクトであること、すなわち、経験のあり方に関する偏見や先入観に導かれ、経験そのもののあり方を歪める主張であることが論証されれば、当然、棄却されなければならない。ちょうど、どのような科学的主張も、それが不適切な条件のもとで行われた実験や観察のプロダクトであることが明らかにされれば棄却されなければならないのと同じことである。しかし、そのような仕方では科学的な主張を棄却したのであれば、当然、実験や観察の不適切な点を具体的に指摘したり、より適切な実験や観察を行ったりすることが不可欠である。それと同様に、特定の現象学的記述を棄却したのであれば、問題となる現象学的記述の隠れた偏見や先入観を具体的に摘発するか、より徹底した現象学的還元を行うことが不可欠である。しかし、「日常的な他者認知の間接性」と「三人称的態度の優位性」が棄却されるべきなのは、それが「客観的世界の偏見」に導かれているからだとも明確に指摘されているのに対して、スポルディングは「日常的な他者認知の直接性」と「二人称的態度の優位性」という現象学的主張を、具体的な問題点を挙げることなく、ただ「間違っている可能性がある」というだけで退けようとする。これは同じ理由で実験や観察に導かれた科学的主張を退けるのと同様に、あまりに乱暴な議論だと言わざるをえない。科学的な主張に関して「可謬性」それ自体が欠陥でないのと同様、現象学的主張についても「可謬性」それ自体は欠陥ではない。したがって、単に「現象学」に依拠していることに基づいて、基本構造テーゼに対する現象学的批判の有効性を否定することはできない。

2.2 暗黙的な基本構造テーゼには積極的な根拠がない

第二の「現象学の無関係性」に関して、スポルディングは次のように書いている。

マインドリーディングにおける理論説とシミュレーション説の論争は、社会的認知（他者認知）を担当する構造とサブパーソナルな過程に関する論争である。どちらの説明も、私たちの通常の相互行為において、現象学が教えてくれる「レベルで」どのようなことが起きているかについては、どのような見方にも加担していない。マインドリーディングには、過程（理論かシミュレーション）があり、産物（説明か予測）がある。一般に、過程と産物のどちらも現象学的に透明である必要はおろか、意識的にアクセス可能である必要もない。（Spaulding 2010, 131, □内の挿入は筆者による）

つまり、彼女によると、理論説とシミュレーション説は非経験的なレベルでの認知に関する理論なので、他者認知に関するどのような現象学的記述とも矛盾しようがない。それゆえ、日常的な他者認知が理論的推論やシミュレーションを媒介した説明や予測として経験されないことは、理論説やシミュレーション説に対する反証にはならない。すなわち、「日常的な他者認知は直接的な評価的理解として経験される」という現象学的記述が正しいとしても、そのように経験される他者認知が暗黙的な推論あるいは暗黙的なシミュレーションに媒介されていることを否定する理由はない。以下、このように暗黙的な「心の理論」の働きは日常的な他者認知の基本的構造の一部をなすという主張を「暗黙的な基本構造テーゼ」と呼ぶ。スポルディングにしたがうならば、暗黙的な基本構造テーゼを想定した理論説やシミュレーション説が問題となっている限り、日常的な他者認知に対する現象学的反省に理論説やシ

ミュレーション説を論駁する力はない。

このような反論に対して、ギヤラガーは大きな譲歩を含んだ応答を事前に用意している。

心の理論を擁護する人は、私たちの他者への関係は現象学的には実践的に相互行為的であるように思われるにしても、実際は暗黙的に理論使用やミュレーションの問題である、と返答するかもしれない。私たちが直接的で評価的な応答にしか気づかないにしても、そのような応答は、理論やミュレーションの構造をしただけでなく、統制された実験だけである。(Gallagher 2005, 215; 2001, 94-95; 最初の強調は原文による、二つ目の強調は筆者による)

ギヤラガーは、現象学的批判だけで暗黙的な基本構造テーゼを退けられないこと、その限りで「現象学の無関係性」が正しい指摘であることを認める。しかし、日常的な他者認知経験そのものが「心の理論」の働きを示唆しないあり方をしているとしたら、あえて、そのような理論的存在の暗黙的な働きを想定する積極的な理由はあるのだろうか。暗黙的な基本構造テーゼの擁護者は、これは実験によって正当化された見方だと主張するかもしれない。だが、「心の理論」の働きを裏付けるとされる代表的な科学的証拠は、ギヤラガーによると、必ずしも暗黙的な基本構造テーゼを主張する良い理由にはならない。

例えば、「心の理論」の存在の経験的証拠として最も頻繁に言及されるのは誤信念課題の実験である。その一種であるサリー／アン課題は次のようなものである (Baron-Cohen et al. 1985)。まず被験者は、サリーという名前の人形がカゴにマールを入れてから部屋を退出するのを見る。次に、アンという名前の人形がやってきて、マール

をカゴから箱に移し替えるのを見る。次に、サリーが戻ってくる。そこで実験者は「サリーは、どこにマールを探しにいくでしょうか」という質問を被験者に問う。4歳未満の子供のほとんどが「箱」と誤答する。ところが、4歳から7歳にかけて「カゴ」と正答する確率が上昇することが知られている。このような実験結果に基づいて、理論説論者とシミュレーション説論者の両方が、(健全な)人は他者の心的状態を推論するための「心の理論」の能力を持っており、その能力は4歳前後の時期から徐々に発達する、と結論づける (Wimmer and Perner 1983; 子安・木下 1997)。

しかし、これを暗黙的な基本構造テーゼを支持する証拠として解釈することはできない。誤信念課題の実験で測られているのは、三人称的な観点から他者の言動を明示的に予測する能力であり、二人称的な相互行為のなかでの評価的理解のための能力ではない。確かに、健全な子供においては4歳前後の時期に他者の心的状態の認識を可能にする暗黙的な「心の理論」が発達すると仮定することによって、誤信念課題の実験結果に関する良い説明を得ることはできるかもしれない。この実験と仮説が他者認知に関わる心理学的能力の発達に関する興味深い貢献であることは間違いない。だが、そうだとしても、あくまで三人称的な観点から心的状態を認識する能力が問題となっている限り、この実験的研究はそれ自体で二人称的な文脈での日常的な他者認知における「心の理論」の中心的役割を主張する暗黙的な基本構造テーゼを積極的に保証するものではありえない。(11)

2.3 「現象学の無関係性」に譲歩する(1)とできない(2)

しかし、これに対して、次のような反論が挙がるかもしれない。確かに、これらの科学的証拠はそれ自体で暗黙的な基本構造テーゼの正当性を保証するものではないかもしれない。しかし、自然現象の背後にはそれを秩序付け

る隠れた構造があるという一般的な見方を取るならば、他者認知をめぐる実験的研究は日常的な他者認知の背後での暗黙的な理論的推論や暗黙的なシミュレーションの働きを十分に示唆していると言えるのではないだろうか。⁽⁹⁾ 実際、「心の理論」に関連する科学的証拠を扱うギアラガーの議論は、暗黙的な基本構造テーゼに合致しない解釈をあらかじめ排除するような試みに対する警鐘にはなりえても、暗黙的な基本構造テーゼのような理論的仮定を行うこと自体と整合しないわけではない。そうだとすると、暗黙的な基本構造テーゼに対するギアラガーの反論は、ほとんど実質的な効力を持たないように思われる。

それどころか、スポルディングは、他者認知の現象学的記述さえ、暗黙的な基本構造テーゼの正しさを示唆していると主張する。「心の理論」の働きが暗黙的であるならば、人は日常的には「心の理論」の働きに気付かないはずである。そうだとすると、暗黙的な基本構造テーゼは、他者認知が「心の理論」に媒介されない直接的なものとして経験されることを非常に良く説明する見方ではないだろうか。

しかし、日常的な他者認知の現象学的反省に忠実にしたがうならば、それを暗黙的な基本構造テーゼの理論的仮定と両立可能なもの、あるいは、積極的な整合性を持つものと見なすことはできない。別の言い方をすると、「現象学の無関係性」を認めることができるのは、問題となる現象学的記述の内容を正確に理解しない場合だけである。ギアラガーの現象学的分析によると、日常的な他者認知において直接的に得られるのは他者の心に関する評価的理解——適切なタイプの身体的／情動的応答を可能にするような理解——ではない。すなわち、それが明らかになっているのは「人は理論的推論やシミュレーションの媒介がなくとも、理論的推論やシミュレーションを行うときと同じように他者を理解することができる」ということではない。理論的推論やシミュレーションは、他者の心的状態をそれとして主題的に認識することを可能にする。それに対して、直接的な仕方では経験されるのは、主題的な他者認知とは現象学的に異なるあり方をした評価的な他者認知である。しかし、暗黙的な理論的推論や暗黙的な

シミュレーションは、暗黙的だとは言え、理論的推論やシミュレーションであることに変わりはない。つまり、他者の心的状態の主題的認識という現象を説明するための概念装置であることに変わりはない。それゆえ、暗黙的な基本構造テーゼは、日常的な他者認知が通常は他者の心的状態の主題的認識ではない仕方を経験されることを原理的に説明することができない。その意味で、日常的な他者認知の現象学的記述は、あらゆる種類の他者認知理論と両立可能なわけではない。したがって、暗黙的な基本構造テーゼが現象学的記述を最も良く説明するという提案はもとより、「現象学の無関係性」を受け入れることはできない。

3 相互行為説と他者の心的状態の主題的認識

現象学の見方にしたがうならば、日常的な他者認知とは、第一には、二人称な相互行為の相手の心を評価的に理解することである。この現象学的主張が日常的な他者認知における「心の理論」の暗黙的な働きの有無をめぐる議論とは無関係だ（「現象学の無関係性」と言うことはできない。というのも、他者の心の評価的理解は、明示的なものだろうと暗黙的なものだろうと「心の理論」の働きによっては説明できないからである。しかし、日常的な他者認知が第一には他者に対する評価的理解なのだとしても、他者の心的状態をそれとして主題的に認識することも日常的な他者認知の重要な一面であることは否定できないように思われる。このことは相互行為説と理論説／シミュレーション説の關係に関して、二つの異なる解釈が可能であることを示唆する。本節では、それぞれがどのような解釈であるかを説明したうえで、私が「ラディカルな相互行為説」と呼ぶ見方さえもが真剣な検討に値する仮説であることを示したい。

3.1 マイルドな相互行為説とフレディカルな相互行為説

日常的な他者認知が他者の心の評価的理解であるならば、他者認知のための日常的な心理学的能力は一体どのようなものだと考えることができるだろうか。相互行為説では、発達心理学の知見を参照しながら、次のような仮説が提案される。

発達科学が語るところでは、子供が心の理論を獲得すると想定される4歳に達するはるか以前に、特定の身体的実践——感情的、感覚運動的、知覚的で非概念的な実践——において、対人的相互行為と間主観的理解の能力は、すでに完成されているのだという。こうした身体的実践は、他者理解のための私たちの一次的アクセスを構成しており、そして、私たちが他者理解においてさらに洗練された能力を獲得した後も、その役割を果たし続けるのである (Gallagher 2001; Zahavi 2004b)。 (Gallagher and Zahavi 2008, 187 [邦訳 283 頁、一部改訳]、Gallagher 2001, 85; 2005, 223-224 を参照)

他者と身体的な相互行為を行うためには、他者の言動に対して、情動やタイミングの点において適切に調整された身体的応答を行う必要がある。また、そのような身体的応答を行うためには、他者の情動や意図を少なくとも評価的な仕方でも理解している必要がある。それゆえ、他者と一定の範囲の相互行為を行うことができる4歳以前の子供において「対人的相互行為」の能力とともに「間主観的理解の能力」が完成している、と考えることができる。しかし、まだ理論的推論やシミュレーションのできない子供たちは、どのようにして他者を理解できるのだろうか。相互行為説で提案されるのは、「他者と相互行為するための能力」が、他者に対する身体的／情動的応答を行うこ

とだけでなく、他者を「行為と表現的行動の機会」(Gallagher and Zahavi 2008, 188)として知覚することも可能にする、という仮説である。ところで、すでに見てきたように、日常的な他者認知に対する現象学的反省によると、子供だけでなく成人の他者認知さえ、ほとんどの場合、他者の情動や意図に関する直接的な評価的理解以上のものではない。それゆえ、相互行為説では、子供だけでなく成人においても、日常的な他者認知を根底で支える認知能力は「他者と相互行為するための能力」、あるいは「私たちに他者の意図を知覚することを可能にさせる身体化された感覚運動的(情動情報を含む)能力」(ibid., 192)なのだと言張される。相互行為説によると、日常的な他者認知とは、ほとんどの場合、他者の行動を相互行為のための実践的技能との関係において実践的に知覚すること以上のものではない。

この仮説の妥当性に関しては異論があつて当然だが、その点は本論では争わないこととする。代わりに以下では、日常的な他者認知における「他者との相互行為のための能力」の役割を強調する相互行為説の見方と「心の理論」の役割を強調する理論説/シミュレーション説の見方の関係を考察したい。二つの見方の関係については、二つの解釈が可能であるように思われる。第一の解釈は、相互行為説を「心の理論」に訴えた説明に対する補足的な理論と見なすことである。この解釈によると、相互行為説と理論説/シミュレーション説が提供するものは異なる現象に対する異なるモデルでの説明である。相互行為説が説明するのは、二人称的な状況での日常的な他者認知のなかの「直接的な評価的理解」あるいは「一次的アクセス」の側面であり、理論説/シミュレーション説は「心的状態の主題的認識」という別の側面を説明するものである。それゆえ、基本構造テーゼの間違ひは部分的なものでしかない。確かに、日常的な他者認知は、まずは二人称的な状況での他者の心の評価的理解として成立するものであり、この認知的活動を「心の理論」の媒介によって説明することはできない。その意味で、理論説やシミュレーション説が日常的な他者認知のあらゆる側面に見出される基本構造を的確に説明していると言うことはできない。しかし、「二

人称の状態の優位性」が正しいとしても、日常的な他者認知は他者の心の評価的理解に尽きるわけではなく、他者の心的状態を主題的に認識することもその無視できない一面である。例えば、共同作業や会話のなかで、相手の心的状態を主題的に意識することは、きわめて日常的な認知的活動であるように思われる。そして、この後者の認知的活動は「心の理論」の媒介によって最も良く説明される。それゆえ、日常的な他者認知の重要な一面に妥当するという意味では、理論説／シミュレーション説は日常的な他者認知を支える心理学的能力を少なくとも部分的には的確に説明することができる。相互行為説は、この解釈によると、理論説やシミュレーション説を排除するものではなく、日常的な他者認知という現象の別の側面——理論説やシミュレーション説では説明できない側面——に関する説明を補足する理論である。この見方を「マイルドな相互行為説」と呼ぶ。

第二の解釈は、相互行為説を「心の理論」に訴えた説明に対するラディカルな代案と見なすことである。この解釈によると、話を二人称な状況での日常的な他者認知に限るならば、相互行為説と理論説／シミュレーション説が提供するのと同じ現象に対する異なるモデルでの説明である。それゆえ、基本構造テーゼは部分的にも正しいものではありえない。すなわち、「心の理論」の働きに訴えた説明は、二人称的な状況で他者の心的状態を主題的に認識するための日常的な心理学的能力に関しても妥当しない。相互行為説は、この解釈にしたがうと、日常的な他者認知という主題に関して、理論説やシミュレーション説を徹底的に排除する理論である。これを「ラディカルな相互行為説」と呼ぶ。

これまでの議論だけを見ると、相互行為説の論者たちが擁護しているのは、他者の評価的理解における身体的技能の中心的役割を仮定するだけのマイルドな相互行為説だと解釈するのが自然だと思われるかもしれない。しかし、興味深いことに、相互行為説の擁護者は第二のラディカルな解釈を提唱しているような論述をすることがある。例えば、ギャラガーとザハヴィは、他者との相互行為のための能力は、他者を評価的に理解することだけでなく、「他

者の心的状態の説明や予測を含むような、発達的に後発の時折しか行われない実践の基礎をもなす」(Gallagher and Zahavi 2008, 189 [邦訳 285 頁])と云う。ここで主張されているのは、他者に対する評価的理解だけでなく、その心的状態の主題的認識も相互行為のための能力に支えられて成立するということだと思われる。しかし、これはどれほど真剣に受け取ることのできる提案なのだろうか。同様の主張は、ギャラガーの単著にもしばしば見受けられる (Gallagher 2001, 91; 2005, 230)。だが、いずれの場合も、そのようなラディカルな結論が導かれる理由は必ずしも明らかではないように思われる。このような主張をするとき、相互行為説の論者たちは、自分たちの理論の射程を不用意に過大評価しているだけなのだろうか。

3.2 相互行為と心的状態の主題的認識

マイルドな相互行為説によると、二人称的な相互行為の相手の心の直接的な評価的理解だけが、他者と相互行為を行うための身体的能力のおかげで成立する。この見方は、他者の心的状態の主題的認識に関する基本構造テーゼと両立可能だと解釈することができる。しかし、相互行為説の論者たちは、よりラディカルな相互行為説を提唱しているように思われる。ラディカルな相互行為説によると、二人称的な相互行為の相手の評価的理解だけでなく、その心的状態の主題的認識においても、中心的な働きをするのは他者と相互行為するための能力である。しかし、これはどれほど真剣な考慮に値する提案なのだろうか。

本節では、ラディカルな相互行為説を擁護するための試験的な議論を提案する。他者の心的状態の主題的認識の事例をいくから見渡してみても、それが相互行為のための能力の働きに媒介されて成立していると考えられる場合が一つもないならば、あるいは、あまりに不自然な状況設定をしないと見つからないならば、ラディカルな相互行為

説が正当な理論である可能性を検討する必要はないだろう。しかし、ごく日常的な状況のなかで主題的な他者認知が相互行為のための能力の働きに媒介されて成立していると考えられる場合があるならば、ラディカルな相互行為説が他者認知のための日常的な心理学的能力に関する最も確な説明である可能性を少なくとも無視することはできないはずである。以下で示したいのは、日常的な会話の中で他者の心的状態の主題的認識が相互行為のための能力（すなわち、情動やタイミングの調整された会話を行うための能力）の媒介によって成立していると考ええることのできる場合がある、ということである。¹³⁾

まず、他者の心的状態の主題的認識が理論的推論に媒介されて成立する事例を考察しよう。通常、会話のなかで人が主題的に認識するのは、会話相手の心的状態ではなくて会話の主題である。会話が円滑に進む限り、相手に対しては評価的な理解しか持たないのが普通である。しかし、直接的で評価的な他者認知は常に得られるわけではなく、そのようなときにこそ、他者の心的状態に対する主題的認識は生じる。例えば、1節では次のような事例をあげた。

男：近くに美味しいワインを飲ませる店があるんだけど

女：ワイン飲むとすぐ酔っちゃうんです（松井2007, 28)

長いデートの後、特に決めていた予定もないので、その後の予定を話し合いながら、異性と街を何となく散策した経験のある人は少なくないだろう。この二人の会話の主題も「この後の予定」だったとしよう。この場合、会話が円滑に進むあいだ、二人が主題的に意識していたのは「この後の予定」だったと想定しても不自然ではないだろう。しかし、右の女性の発言が状況を変化させる。この発言では、女性がワインの店に行きたいのか行きたくないのか

が明らかではなく、男性は、女性に対する十分な評価的理解を得ることができなかった——すなわち、それに相応しい身体的／情動的応答を行える程度まで、女性の意図を把握することができなかった。それゆえ、彼は、少し間をとって、彼女の口調、表情、仕草、それまでの言動、このような状況での男女のやり取りに関する知識を頼りに理論的推論を行って、彼女はワインの店に行きたいのだと結論したとしよう。このとき、男性が主題的に意識しているのは、明らかに女性の心的状態——「ワインの店に行きたい」という欲求——である。それゆえ、これは頭の中での理論的推論に媒介されて、他者の心的状態に対する主題的認識が成立している事例だと考えることができる。次に、少し違う場合を考えてみよう。「この後の予定」の話をするなかで、女性が意図の見えにくい発言をするところまでは、さきほどの場合と同じである。だが今回は、二人は次のような会話をするようになった。

男：近くに美味しいワインを飲ませる店があるんだけど

女：ワイン飲むとすぐ酔っちゃうんです

男：帰りたい？

女：いや、せつかくだから、そのお店に行ってみたいです

男性が「帰りたい？」と尋ねたのは、さきほどの場合と同様、女性の意図が良く分からなかったから、すなわち、女性の意図に対する十分な評価的理解が得られなかったからだと思われる。また、それ以降の会話では、まさに「女性の欲求（帰りたいのか、ワインの店に行きたいのか）」が会話の主題なので、男性は女性の心的状態を会話の主題として主題的に意識しているように思われる。そして男性は、最終的に女性の返事を聞いて、その心的状態を主題的に認識できたと思われる。そうだとすると、この場合、女性の心的状態に対する主題的認識は、男性の頭の中

での認知過程ではなく、女性との会話の展開そのものに媒介されて成立している、と考えることができる。というのも、さきほどの事例で頭の中の理論的推論が果たした認知的役割と今回の事例で会話そのものの展開が果たした認知的役割は、全く同じだからである。すなわち、どちらの過程も女性に対する不十分な評価的理解に動機づけられて、女性の心的状態に対する主題的認識を成立させる役割を果たしている。ここでは、相互行為の相手に対する主題的な他者認知は、頭の中で理論的推論やシミュレーションを行うことではなく、会話という相互行為そのものに従事することによって得られている。ところで、会話の展開を通して男性の言動を決定しているのは、他者の言動に情動やタイミングの調整された言動で応答するための能力——会話という言語的相互行為のための能力——ではない。したがって、この例においては、他者の心的状態に関する主題的認識さえ、相互行為のための能力の働きに媒介されて成立している。

相互行為説の論者たちは、会話などの相互行為のなかでの他者の心的状態の主題的認識の基本的な成立構造を反映したのは、二つ目の事例であることを示唆する。

三人称の立場からの行為の説明や予測は、私たちの通常の相互主観的な方法、すなわち対話や会話、そして共有された物語を通じて他者を理解する方法よりも、ずっと稀ではるかに信頼性が低い (Hutto 2004)。もし誰かが不可解な仕方で行為しているなら、さらなる情報をうるための、群を抜いて最も簡単に信頼できる方法は、傍観的な理論化や内的シミュレーションを行うことではなく、会話能力を駆使して相手に説明を求めることなのである。(Gallagher and Zahavi 2008, 193 [邦訳 291-292 頁])

この観察が正しいとすると、他者の心的状態の主題的認識に関しても、そこで中心的な役割を果たすのは相互行為

のための能力——とりわけ、相手の発言に対して適切な発話で応答するための言語的相互行為のための能力——だと考えられる。もちろん、本節での議論は、この仮説の最終的な妥当性を保証するものではない。第一に、相互行為を通じて相手の心的状態が認識される場面に関しても、マイルドな相互行為説と理論説／シミュレーション説を組み合わせた説明ができないわけではなからである。例えば、会話のなかでの主題的認識は、一連の相互行為を反省的に総括し、そこから推論を行うことによつて得られる、と説明できるかもしれない。¹⁴ 第二に、仮にこの例に関してはラディカルな相互行為説が正しかったとしても、理論的推論に媒介された主題的認識と相互行為そのものの展開を通じて成立する主題的認識のどちらが日常的な他者認知の基本的構造を反映したものであるかは、これだけでは決定することができない。しかし、これほど日常的な事例に関して、他者の心的状態の主題的認識が理論的推論やシミュレーションの働きでなくて相互行為そのものに媒介されて成立している可能性を排除できないならば、ラディカルな相互行為説が妥当な選択肢である可能性も否定できないはずである。したがって、ラディカルな相互行為説は、現時点では十分に正当化された仮説だと言うことはできないが、少なくとも、その正当性を真剣に検討すべき仮説だと言うことができる。

4 結論

本論では、日常的な他者認知には、二人称的な相互行為の相手の評価的理解とその心的状態の主題的認識という二つの側面が含まれることを際立たせ、相互行為説の射程に関して二つの異なる解釈を取りうることを示した。日常的な他者認知を説明するためには、現象学的反省によつて明らかにされた二つの側面のあいだの区別を何らかのかたちで確保することが必要である。その限りにおいて、現象学が他者認知のための日常的な心理学的能力の本質

をめぐる論争と無関係だと考えることはできない。この二つの側面を説明するためには、相互行為の相手の評価的理解に関しては相互行為説を採用し、その心的状態の主題的認識に関しては理論説あるいはシミュレーション説を受け入れることができるかもしれない。この提案を私は「マイルドな相互行為説」と呼んだ。その一方で、評価的理解だけでなく、他者の心的状態に対する主題的認識も通常は相互行為のための能力を動員することで成立すると考えることもできる。これを私は「ラディカルな相互行為説」と呼んだ。本論の議論にしたがうならば、どちらの提案も他者認知のための日常的な心理学的能力に関する真剣に検討されるべき仮説だと考えられる。どちらの提案が正しいかを確定させることは、今後、心の哲学や現象学の観点からだけでなく、認知科学の成果との整合性も含めて検討されるべき重要な課題だと思われる。

謝辞

本稿は二〇一一年六月二十日に東京学芸大学の松井智子教授を招いて東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)「科学技術と社会」プログラム主催で行われたワークショップ『心の理論』——実証的研究と哲学的検討』で発表した内容を敷衍したものである。ワークショップの参加者／企画者の皆様に感謝申し上げたい。

- Baron-Cohen, S. 1995. *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. Cambridge, MA: MIT Press. (「クロナ＝ロー
 エン, S. 長野敏・長畑正道・今野義孝 (訳) 1997. 『自閉症とトメインド・ブレインドネス』 東京: 青土社.)
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. and Frith, U. 1985. Does the Autistic Child Have a 'Theory of Mind'? *Cognition* 21:37-46.
- Churchland, P. M. 1989. Folk Psychology and the Explanation of Human Behavior. In *Philosophy of Mind and Action Theory*,
 ed. James E. Tomberlin, 225-241. Atascadero: Ridgeview.
- Clark, A. and Chalmers, D. 1998. The Extended Mind. *Analysis*, 58 (1), 7-19.
- Dennett, D. 1987. *The Intentional Stance*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Gallagher, S. 2001. The Practice of Mind. Theory, Simulation or Primary Interaction? *Journal of Consciousness Studies* 8, no.
 5-7: 83-108.
- 2005. *How the Body Shapes the Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Gallagher, S. and Zahavi, D. 2008. *The Phenomenological Mind: An Introduction to Philosophy of Mind and Cognitive
 Science*. London: Routledge. (ギヤラガー, S., ザハヴィ, D. 石原孝二・宮原克典・池田喬・朴嵩哲 (訳) 2011. 『現
 象学的な心: 心の哲学と認知科学入門』 東京: 勁草書房)
- Gallese, V. and Goldman, A. 1998. Mirror Neurons and the Simulation Theory of Mind-reading. *Trends in Cognitive Sciences*
 2, no. 12: 493-501.
- Gordon, R. M. 2009. Folk Psychology as Mental Simulation. In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2009 Edition),
 ed. Edward N. Zalta. URL=<<http://plato.stanford.edu/archives/fall2009/entries/folkpsych-simulation/>> [accessed

September 19, 2011].

Krueger, J. and Overgaard, S. forthcoming. Seeing Subjectivity: Defending a Perceptual Account of Other Minds.

ProtoSociology: Consciousness and Subjectivity. URL=< <http://www.joelkrueger.com/wp-content/uploads/2011/02/>

Seeing-subjectivity.pdf> [accessed September 19, 2011]

子安増生・木下孝司「へ心の理論へ研究の展望」、『心理学研究』68、1号：51-67.

松井智子 2007. 『語用論』から見たコミュニケーション教育——言葉の裏にある話し手の意図の理解——」.

BERD 11: 28-32. URL=<http://benesse.jp/berd/center/open/berd/2008/01/pdf/11berd_06.pdf> (二〇一一年九月十九日にアクセス).

—— 2009. 「知識の呪縛からの解放——言語による意図理解の発達」. 『ソーシャルブレインズ：自己と他者を認知する脳』所収、開一夫・長谷川寿一（編）『217-244. 東京：東京大学出版会.』

Merleau-Ponty, M. [1945] 2006. *Phénoménologie de la Perception*. Paris: Gallimard. (メルローポントイ, M. 竹内芳郎、小木貞孝、木田元、宮本忠雄（訳）1967-1974. 『知覚の現象学』1-2、東京：みすず書房.)

Nichols, S. 2002. Folk Psychology. In *Encyclopedia of Cognitive Science*, ed. Lynn Nadel. London: Nature

Publishing Group. URL = <<http://www.hum.utah.edu/philosophy/faculty/nichols/Papers/FolkPsychologyFinal.htm>> [accessed September 19, 2011].

Ratcliffe, M. 2008. *Rethinking Commonsense Psychology: A Critique of Folk Psychology, Theory of Mind and Simulation*. Basingstoke, UK: Palgrave-Macmillan.

Spaulding, S. 2010. Embodied Cognition and Mind Reading. *Mind & Language* 25, no. 1: 119-140.

Wimmer, H. and Perner, J. 1983. Beliefs about Beliefs: Representation and Constraining Function of Wrong Beliefs in Young Children's Understanding of Deception. *Cognition* 13: 103-128.

註

- (1) 「心の理論」あるいは「素朴心理学」を、行動を引き起こす原因としての心的状態を他者に帰属させる能力と定義することには異論があるかもしれない。例えば、ダニエル・デネットは、素朴心理学を用いて行われるのは、行動の理由としての心的状態を他者に帰属させる規範的理解だと考える (Denett 1987)。しかし、デネットのような見方は「心の理論」の観点から他者認知の説明を試みる近年の理論家のあいだでは必ずしも一般的ではないので、本論では「心の理論」および「素朴心理学」という用語は前者の用法に限定して使用する。さらに、他者認知を記述的理解(言動の原因としての心的状態の帰属)として描くか、規範的理解(言動の理由としての心的状態の帰属)として描くかという論点は、以下の議論の目的に重大な影響を及ぼすものではない。
- (2) 例えば、シミュレーション説論者の哲学者ロバート・ゴードンは次のように言う。「シミュレーション(あるいは「心的シミュレーション」)説(ST)は人間の日常的な心理学的能力に関する理論、人々が行動の予期、説明、そして社会的協働において日常的に利用する技能と資質に関する理論である」(Gordon 2009, 1; 強調は筆者による)。あるいは、理論説とシミュレーション説の混合理論を推進する哲学者ショーン・ニコルスは次のように言う。「哲学と認知科学における素朴心理学をめぐる近年の議論の大部分は、素朴心理学の中の行為の予測と説明を導く部分に焦点を当てて来た。素朴心理学の中でもこの部分に関心が向かうのは、おおかた、それが私たちの日常生活において持つ中心的な役割のためである。素朴心理学的な予測や説明は私たちの生活に溢れている」(Nichols 2002, 1; 強調は筆者による)。この二人だけでなく、他にも多くの論者が基本構造テーゼへの共感を表明している (Gallagher 2001, 84-85; 2005, 207-208)。
- (3) 同じ主張をギャラガーは「強い実践的主張 [strong pragmatic claim]」と呼び、スボルディングは「マインドリーディングの射程が広いという主張 [broad scope of mindreading claim]」と呼ぶが、どちらも日本語の語呂が悪いので、本論では「基本構造テーゼ」という名称を用いる。
- (4) 同じ主張をギャラガーは「精神化仮定 [mentalistic supposition]」と呼ぶ。だが本論では「間接性」と「直接性」の対比を際立たせ

るために「日常的な他者認知の間接性」という名称を用いる。

- (5) 本論で参照する現象学的な他者論は、基本的に「間身体性 [intercorporeity]」の概念を中心に据えたメルロ＝ポンティの他者論である。しかし、フッサール、ハイデガー、シェーラー、サルトルなど他の現象学者は、それぞれに固有の特徴を持った他者論を展開しており、その全てがメルロ＝ポンティの他者論と整合的だとは限らない。様々に展開される現象学的な他者論の簡潔なまとめとしては Zahavi 2001 を参照せよ。

- (6) 他者認知の様態は様々であり、他者は一人称複数「私たち」として現れたり、非人称的な「ひと」として現れたりもする (Zahavi 2001 を参照せよ)。煩雑になるのを避けるため、本論では一人称単数の「私」と二人称単数の「あなた」／三人称単数の「彼 (女)」が直接に顔を合わせるときの間主観的關係に焦点を当てる。だが他者経験の多様性は、今後、現象学だけでなく、心の哲学や認知科学の観点からも探究されるべき重要な主題だと思われる。

- (7) 実験的介入の役割や観察者効果の問題を考慮すると明らかのように、このような描写は科学的観察一般に当てはまるものではない。観察を行う科学者と観察対象の關係が一般的にここで言うような意味で三人称的だと考えることはできない。

- (8) 天体のふるまいと無關係に天体観測を行うことは、友人の言動と無關係に話をするのと同じくらい難しい、と言えないこともない。その意味では、天文学者と天体の關係も純粹に三人称的ではないかもしれない。しかし、ここでの目的は、あくまで三人称的關係／二人称的關係という概念区分を明確にすることにあるので、事例の厳密さはさしあたり問題にならない。

- (9) これらの二つの前提が理論説やシミュレーション説の全てのヴァージョンに受け入れられていると断言することはできないかもしれない。しかし、少なくとも、これらが多くの理論説論者、シミュレーション説論者に共有される前提であることは間違いない。例えば、子安・木下 (1997) は「心の理論」という概念で他者認知を考察する動機として、次の二つを挙げている。

1. 心の状態は、直接に観察できる現象ではなく、科学理論のように推論に基づいて構成される性質のものであること
2. いったん心についての理論を構成すれば、科学理論がさまざまな現象の生起を予測し得るのと同じように、それに基づいて他者 (他の動物) の行動をある程度予測することが可能となること。(S: 強調は筆者による)

1が「他者認知の間接性」に対応することは明らかである。2は「三人称的態度の優位性」に対応するように思われる。ここでは他者認知は「他者の行動を予測すること」だとされているが、「予測」とは三人称的な観点から一方的に行われる認知的活動の

典型例である。

- (10) ただし、以下はスボルディング自身の言い方ではなく、彼女の論点を筆者が定式化したものである。
- (11) ギャラガーらは、ミラーニューロンの存在を示唆する経験的知見に基づいて、日常的な他者認知における暗黙的なシミュレーションの働きを主張することに対する批判も行っている (Gallagher 2001, 101-103; 2005, 220-223; Gallagher and Zahavi 2008, 177-181)。
- (12) この仕方での問題の定式化を教示してくれた査読者に感謝したい。
- (13) 少し異なる文脈と結びつけるならば、以下で試みるのは、「拡張した心」あるいは「拡張認知仮説」のための議論 (Clark and Chalmers 1998) を応用して、ラディカルな相互行為説の擁護を試みることである。
- (14) このような説明の可能性を教示してくれた査読者に感謝したい。